

『キターブ・バフリエ』に見えるアナトリア南岸

新谷 英治

はじめに

16世紀前半にオスマン朝で編纂された地中海航海案内書『キターブ・バフリエ』*Kitāb-i Bahriya*については、わが国では内容や構成、あるいは成立事情、典拠文献、さらには史料的な意義などが論じられたことはあるものの、韻文序を別にすれば、本書の特定部分（特定の地域・海域）のある程度まとまった日本語訳が示されたことはない。韻文序を含めた序文、および本文、跋文に互る書物全体の日本語が提示されることが望ましいのは言を俟たないが、今しばらく時間を要すると思われる事情もあり、ここでは紙幅の許す限りで本文の一部分の日本語訳を試みることにする¹⁾。

ここに示すのは『キターブ・バフリエ』本文のアナトリア海岸、特にシリアとの境界域からマルマリス Marmaris（現トルコ共和国）に至るアナトリア半島南岸一帯に関する記述の日本語訳である。これは、『キターブ・バフリエ』本文の第176章から第194章に相当し、このうち第186章はアナトリア南岸沖のキプロス島の説明に充てられている。キプロス島をアナトリア南岸の地域に含めるのは当たらないかとも思われるが、『キターブ・バフリエ』の構成・叙述の順に従って、ここでは翻訳の対象としたい。

周知のとおり『キターブ・バフリエ』の地中海各地に関する説明はダーダネルス海峡の出口に近い Sultāniya 城（現在チャナッカレ Çanakkale 市域に含まれる：アナトリア半島側）とその対岸の Kalid al-Baḥr 城（キリトバヒル Kilitbahir：ガリポリ半島側）の両城から始まる（本文第1章）。両城のあと、エーゲ海の島々の一部を説明したのち、地中海北岸部を西へと進み（第2章から第139章）、ジブラルタル海峡を南に越えて地中海南岸（アフリカ大陸北岸）に至り、ここから東方向にエジプトへと向かう（第140章から第167章²⁾）。続けて、シナイ半島を経てシリア海岸を南から北へと説明したのち、アナトリア半島東南部に至

1) 韻文序については三橋 1970、新谷 2011 などでも部分的な日本語訳が試みられている。なお、序文・本文を問わず、現代トルコ語やヨーロッパ諸語への翻訳のうち主なものについては、Allibert, Ari, Bacqué-Grammont et Bresc, Bausani, Mantran, Ökte, Senemoğlu, Soucek らの研究を参照されたい。

2) 新谷 1990 において、『キターブ・バフリエ』における「北アフリカ東部」区域を Gaza や Ramla が扱われる第169章としたが、その前の第168章までとすべきであったかもしれない。

る（第168章から第176章³⁾）。さらに、西方のエーゲ海に向かうようにアナトリア半島南岸部が説明される（第177章から第194章）。この部分が今回の日本語訳の対象である。このアナトリア半島南岸部の説明の後には、エーゲ海海域のうち先に説明されずに残されていた島々などが述べられ、地中海を順にめぐるとこの航海案内書の説明はガリポリ半島西のサロス湾で完了する（第195章から第210章）。

アナトリア半島は11世紀以降トルコ化、イスラーム化が進み、ルーム・セルジューク朝やモンゴルの支配を経て14-15世紀にはオスマン朝の中心的な領域となった。その南岸部は、歴史的に東のアラブ文化地域と西のギリシア文化地域の間にあつて、両者を繋ぎ、また隔てる地域であつた。『キターブ・バフリエ』本文においては、説明の分量的な比重は大きいとは言えないが（章数で8.6%、ページ数で約6.2%）、アランヤやアンタルヤなどの都市・海港に関する記述には興味深いものがあり、それらの地が果たした歴史的役割を考えるうえでいささかなりとも材料を提供できるのではないかと考える。

以下の日本語訳作成に際しては Ayasofya 2612 写本を底本としている。同写本の利用にあつては、所蔵元である Süleymaniye Camii Kütüphanesi から提供を受けた同館作成のデジタル写真データを用いるが、1935年刊行のファクシミリ版 [Kurtoğlu & Alpago 1935] のほか数種刊行されている写真版も適宜参照する。また、Ayasofya 2612 写本とあわせて、TY 6605 写本 (İstanbul Üniversitesi Kütüphanesi 所蔵) や Arı 2002 の底本とされた Hazine 642 写本 (Topkapı Sarayı Müzesi Kütüphanesi 所蔵) など、数種の写本を必要に応じて参照することにする。なお、『キターブ・バフリエ』の写本およびそれらの現存状況の概略については Soucek 1992, 新谷 1990, 1992 を参照されたい。

『キターブ・バフリエ』932年本本文は素朴なオスマン・トルコ語散文で書かれている。素朴な文章ながら——あるいは素朴なるがゆえに——解釈に窮する表現にも少なからず出会う。しかし、以下の訳文において、誤った解釈をしている部分や原文の意を十分に伝えていない箇所については、偏に訳者の力不足によるものであり、読者諸氏の叱正をお願いする。

なお、Soucek が北アフリカ海岸の区域に関して試みているように [Soucek 1973a], 本来『キターブ・バフリエ』927年本の対応部分と対照して訳文を示すべきと思われる。両写本系統の対比や説明対象の地域・区域に関する叙述ぶりの比較などの観点で興味深い事実が知られると期待されるが、紙幅の制約もあり、別の機会を得たいと考える。

3) 新谷 1990 において、『キターブ・バフリエ』における「シリア海岸」区域を İskenderun や Ayas (今日の Yumurtalık) が扱われる第177章までとしたが、それは歴史的なシリアの海岸に位置する İskenderun に注目したことによるものであり、ここではアナトリア南岸に位置する Ayas に注目して、第177章をここで扱うアナトリア南岸の始まりとする。

『キターブ・バフリエ』に見えるアナトリア南岸（第177章から第194章）

375a 第177章：本章はイスカンダルーン Īskandarūn の方面 jānīb 及びアヤース Ayās の海岸を説明する。

このイスカンダルーン⁴⁾は低い岬の上にある荒れた城 qal'a⁵⁾である。その城の前面は、西 [と?] 南西と南から [その城の前の西側は、南西と南から?] 吹く風には良い停泊地である。しかし walī, 2方向へ錨を用いて停泊する。船が停泊するところは [水深] 10 尋 qulach である。しかし ammā, この低い岬から1マイル離れて進むべし。その岬の端は浅瀬であるから。

さて、このイスカンダルーンからアヤース⁶⁾は12マイルである、西北の方向に。このアヤース城 Ayās Qal'ası を、故スルターン・バーヤズィード・ハーン Sulṭān Bāyazīd Khān⁷⁾が、ミスルの人々 Miṣīrlī⁸⁾の手から取り、破壊した。その城の前に小島がある。その小島の海峡では2尋の水深である。小型の船が停泊する。しかし ammā, 大型の船はその島の外側で停泊する。大索 palamar をその小島に結ぶ。錨を東の方へと6尋の水深のところ以降ろす。

さて wa ba'dahu, このアヤースからこちら側にカーズィーク Qāziq 港⁹⁾という停泊地がある。その停泊地からこちらがジハーン川 Jihān Şuyu¹⁰⁾である。このジハーン川のこちら側に、ウード城 Ūd Qal'ası¹¹⁾という、海に面した高いところにある荒れた城がある。その城の下、即ち西南側に小島がある。その小島をプールタ・マルーン Pūrta Malūn¹²⁾という。小型の船がこの島と [アナトリア] 海岸の間に入る。そこから中はアダーナ川 Adāna Şuyu¹³⁾

4) Īskenderun/Alexandretta. Īskenderun 湾の東岸に位置し、Issus の戦いで Alexander 大王の勝利を記念して建設された Alexandria ad Issum の場所に当たる。16世紀以降オスマン朝支配下に置かれた。シリアの Aleppo の外港の役割を果たしていた。

5) 以下、特に断りが無い限り、訳語「城」の原語は qal'a である。

6) Ayas/Āyās. 今日の Yumurtalık に当たり、Īskenderun 湾の西岸に位置する。古くは Aigai として知られ、後に Ayazzo/Lajazzo と呼ばれた。13世紀後半に東西交易の重要な港となり、14世紀中頃に Mamlūk 朝の支配下に入った。16世紀初頭以降はオスマン朝領となった。

7) Bāyazīd 2世を指すと思われる。

8) エジプトの人々の意。具体的には Mamlūk 朝を指すと思われる。

9) Ökte 1988: 1577 (注4-176) [以下、Ökte 1988 に付された注に言及する場合は、特に断らない限り英訳に付された注によるものとする。参照表示は簡略にし、この場合は1577ページ目(第4分冊)の注176を示す] では「Ceyhan 川と Yumurtalık の間の小さな古い港」とする。

10) Ceyhan/Jayhān 川を指すと思われる。古代の Pyramus に当たり、より西に位置する Seyhan/Sayhān/Saros 川(本文中で後出の Adāna Şuyu であろう)とともに Cilicia 地方を流れて地中海に注ぐ。

11) 不詳。

12) 不詳。Ökte 1988: 1577 (注4-179) では、「El Melun. Ceyhan 川の古い河口の港。その港のあった所に今日 Bebeli と呼ばれる村がある」とする。

13) Seyhan/Sayhān/Saros 川を指すのであろう。

である。これは大きな川である。アダナ城 Adana Qal'asi¹⁴⁾の前へ流れ来ている。海に注ぐ。このように心得るべし *shöyleje mulâhaza oluna*。以上。

376a 第 178 章：本章はタルスース Tarsûs とクールクース Kûrkûs の海岸を説明する。

このタルスース¹⁵⁾は海岸から 3 マイル程内陸に入った平原に位置する町 *qaşaba* である。その町の前を川 *şu* が流れている。この川へサンダル *şandallar*¹⁶⁾が入る。その川の河口に塔 *birghûs* があり、この塔に正面して 6 尋の水深に錨を降ろす。停泊する。先の [表題で名の挙がった] クールカス Kûrkas¹⁷⁾は荒れた城である。その城の前に港があり、この港の両側は荒れた建物である。しかし *ammâ*、その港に正面して小島がある。その小島の上に荒れた城¹⁸⁾がある。もしこのクールクース港へ行きたいければ、その小島を左側にとってこの小島と城の間に錨を降ろす。大索をその小島に結ぶ。錨を東北の方へ 10 尋の水深に降ろす。停泊する。もしその小島の海峡を通過するならば、深さは 17 スパン *qarış* である。このクールクース城の目印はこうである。その城の上手が大きな山である。

さて *wa ba'dahu*、このクールクースからシリフケ *Silifke*¹⁹⁾は 12 マイルである。かく知られるべし。以上。

377a 第 179 章：本章はカラマーン海岸 *Qaramân Qıyıları*²⁰⁾のシリフケ *Silifke* 海岸を説明する。

このシリフケ²¹⁾は海岸から 7 マイル程内陸の高いところ²²⁾に位置した城である。この城は現在 *shimdiki hâlde* 人が住む *ma'mûrdur*。その城の正面にある海岸においてシリフケ岬 [の長さ] は 6 マイルである。カーフィルの人々 *kafara tâ'ifası* はこの岬をプンタ・ディルバガーシャ *Pûnta Dilbaghâsha*²³⁾という。有名な岬である。しかし *ammâ*、もしクブ

14) Adana/Adhana/Adâna/Âtana.

15) Tarsus/Ṭarsûs. アナトリア半島東南部の Tarsus 川のほとり、海岸から約 20km 内陸に位置する。Taurus 山脈を越えてアナトリア内陸部と Cilicia 地方を結ぶ幹線の出入り口であり、古くから要衝として知られた。ローマの支配を経て 712 年ウマイヤ朝によって征服された。1097 年十字軍の手に落ち、14 世紀に Mamlûk 朝によってムスリムの手に奪い返された。16 世紀にオスマン朝に組み込まれた。

16) *şandal* は船に積んだり曳いたりできるほどの大きさの小船 [Soucek 1992b :18]。

17) Kûrkûs とともに Korgos/Korykos を指すと思われる。今日の Kız Kalesi の地点に当たる。

18) Kız Kalesi を指すのであろう。

19) *Silifke*。次章で説明される。

20) *Qaramân* は、13 世紀に東南アナトリアで勢力を扶植したオグズ系トルコ族の国家 (*Qaramân* 君侯国) に由来する名称であり、*Qaramân* の海岸とは、かつて *Qaramân* 君侯国が勢力を張った地域の海岸部の意味であろう。*Qaramân* 君侯国はオスマン朝の圧迫に耐えつつ勢力を維持していたが、最終的に 1483 (ないし 1487) 年にオスマン朝によって滅ぼされた。

21) *Silifke/Seleucia*。紀元前 3 世紀に Seleucus 1 世 *Nicator* によって築かれた *Seleucia Tracheotis* に起源する。*Qaraman* 君侯国の中心的都市の一つであり、君侯国末期には首都の役割を担った。

22) 現在の町の中心部の標高は 20m 前後。

23) TY 6605 写本では *Pânta Di-lbighâsha* か。*Silifke* 南方の海岸に位置する *İncekum* 岬を指すと思われる。

ルズ Qıbrız 島々²⁴⁾からこのカラマーンの海岸へ渡る事があれば、スリフケよりもすべてのカラマーンの山々²⁵⁾が高い。その山が西側へと尽きたところにこのプーンタ・ディルバガーシャ [がある]。しかし ammâ, アク港 Aq Liman²⁶⁾の側は低い。というのは、遠くから大きな低い山々の姿を見せている gösterür。

さて wa ba'dahu, このプーンタ・ディルバガーシャは「娼婦の岬」Qahba[Qahba] burmの意である。その岬は南に面した細く低い砂の岬である。また、端は浅瀬である。この岬から6マイル西北側にアヤートウドゥーラ Ayâtûdüra という天然の、何も無い khâli 港がある。この港をトルコの人々 Türk tâ'ifası はアク港 Aq Liman という。しかし wali, その港の入口から外に、アヤートウドゥーラの荒れた城がある。その城の西南側に東南に向って流れる川 şu がある。この川を西の方に回り込むと、ウースクイー・プールウィーン・サールー Ūsqüy Pürwin Sâlû²⁷⁾ という島がある。その島の西北側に岩礁 tash がある。この岩礁は水面に見える。しかし ammâ, もしそのウースクイー・プールウィーン・サールー島に行きたければ、その島は海岸へ2マイルである。またそこには貯水槽 sarnıçlar がある。その貯水槽で飲み水が見つかる。そこへ至った船は大索をその島に結び、錨を北側へ8尋の水深へ [降ろして] 停泊する。もし海岸に近いキュスュレ Küsüre 島²⁸⁾に行くならば、それもまた良い港である。海岸はすべてキュスュレ石である。この港からベシュ・バルマク Besh Barmaq は10マイルである、西南の方に。かく知られるべし。以上。

378b 第180章：本章はカラマーンの海岸 kanârlar にあるベシュ・バルマクの海岸を、そしてキリンディラ城 Kilindira Qal'ası を説明する。

このベシュ・バルマク²⁹⁾は島のような丸い岬である。その岬の両側は、二つの停泊地である。その停泊地のどこでも1スパン bir ki qarış³⁰⁾掘ると真水 tatlu şu が出る。この岬をカーフィルの人々 kafara tâ'ifası はカーウ・クーラールー Qâwu Qûlârû³¹⁾ という。その正面

24) Kypros/Kıbrıs/Cyprus. 第186章で説明される。

25) Taurus 山脈を指すと思われる。

26) 不詳。Silifke 西南に位置する Ayatekla (現在は内陸の町) を指すのであろうか。あるいは Bogşak か。Ökte 1988:1585 (注4-187) では、「Ağa limanı. Silifk 南方の沿海の町。Halmi の名でも知られ、古い資料では Viranşehir としても言及される」としている。

27) 不詳。Dana Adası か。付図では İsqüy Purwinsa か。Ökte 1988:1585 (注4-188) では「Bağsak Adası. Taşucu Körfezi の西岸沖の島」とする(トルコ語訳の注では Dana Adası が補われている)。

28) 不詳。Güvercin 島あるいは Dana 島を指すものか。kösüre, küsüre は砥石の意。Ökte 1988:1587 (注4-189) では「Kösrelik Adası. Taşucu 湾の海岸に近い島。Küsüre はおそらくノヴァキュライト novaculite —— 砥石として使われる、硬くきめの細かい鉱物 —— であろう」とする(トルコ語訳の注では Ovacık Adası とされている)。

29) barmaq は parmaq (指の意) であろう。従って Besh Barmaq は「5本指」の意と思われる。Ovacık 岬あるいは Sulusalma 岬を指すのであろう。

30) bir iki qarış か。TY 6605 写本ではこの部分は記されていない。

31) TY 6605 写本では Qâwu Qûlârî.

にピラーサ島 Pirâsa Adası³²⁾という丸い島がある。その島と岬の間を大きな船が通る。深い。

さて wa ba'dahu, この島からキリンディラ Kilindira³³⁾は5マイルである。この途中に二つの小島がある。これらの小島をイーズイラ・ダラ・ワントウラ İzila Dala Wantûra³⁴⁾という。これらの島々の正面に水の流れる川 aqar şu がある。しかし ammâ, このキリンディラは東に面した海岸で岬の上にある荒れた城である。その城についてこんな話がある。クブルズからかなりの数の bir niche ヴェネツィア Wanadik のカーフィルたちが商人の姿をしてこの城へ1隻の船で石罅をもってきた。金曜日になると、その石罅をこの城へ運び上げてその城の門の前に箱に入れて積み上げた。城の人々は金曜礼拝に行くことになって、その石罅を門の前から取り除くことを望んだ。彼らは石罅の箱がたくさんあるのを知り、その箱をそのままにして[城の門を閉めずに]礼拝に入った³⁵⁾。カーフィルたちは住民が金曜礼拝に行ったことを知り、好機を悟る。住民が気付かぬうちに剣を抜き、この城を取った。その時以来この城は荒れている。しかし wa illâ, 塔と城壁 burj [o] bârûsı は完全[無傷]である。その城の前に小さな港がある。その小港に小型の船が入る。かく知られるべし。以上。

379b 第181章：本章はカラマンの海岸 kanârlar にある新旧のアナムール Anâmûr を説明する。

この新アナムール Yeñi Anâmûr³⁶⁾は海から少々内陸の、荒れた城である。その城の前を大きな川 su が流れている。その川の両側は大きなナーティル葦が茂るところ³⁷⁾である。この川の正面の海は良い投錨地である。しかし ammâ, 旧アナムール Eski Anâmûr³⁸⁾は海を見下ろして聳える hawâla 岬の上に位置する。この岬は山である。その山の上で、この[旧]アナムールの城は遠くから見える。その遠くから見えることによってこの城は良い目印である。その城の下に、しかし walî, 東側に停泊地がある。その停泊地では強い西風 pirawancha³⁹⁾の吹く日々になると、大索を城のがわで海岸に結ぶ。錨を東側20尋の水深に

32) 不詳。Ökte 1988: 1591 (注4-191)では「Babadil. Sulusalma Burnı の沖の小島」とする。

33) 現代トルコ語表記では Gilindire. 今日の Aydıncık に当たる。

34) 不詳。Ökte 1988: 1591 (注4-193)では「Aydıncık の東, Sancak Burnu の西に位置する島々」とする。

35) Bağdat 337 写本 (Topkapı Sarayı Müzesi Kütüphanesi 所蔵) などの 927 年本系写本における叙述ぶりからは、石罅の箱のために住民が已む無く城の門を開けたままにした様子が読み取れる。

36) Anamur. アナトリア半島最南端に位置する Anamur 岬から約 5 km 東北の平地にあり、Anamur 川がその近くを流れる。古くは Stallimuri/Stalemura と呼ばれた。Anamur 岬により近い海岸及び斜面により古い起源を有する Anemurium/Anemorium の遺跡が広がっている。本文で続いて言及される Eski Anâmûr はこれであろう。

37) iri nâtir qalamlıqları とある。nâtir の解釈に苦しむところで、Ökte 1988: 1595 でも、nâtir をどのように理解しているのか判然としない。なお、ペルシア語の nâ-tar と解すれば「湿っていない」、「濡れていない」、すなわち「乾いた」の意。

38) 上の注 36) 参照。

39) provenza に当たり、西南西の意。『キターブ・バフリエ』では、強い西風の意で用いられている [Kahane & Tietze 1958: 361-362]。

降ろす。バルチャ⁴⁰⁾が停泊できるところ *yatur qâbil yer* である。

さて *wa ba'dahu*, このアナムールからカラティラーン *Qalaṭīrân* は 15 マイルである。かく知られるべし。以上。

380b 第 182 章：本章はカラマーンの海岸 *kanârlar* にあるカラティラーン *Qalaṭīrân* とアフマドジャ *Aḥmadja* という名のところを説明する。

このカラティラーン⁴¹⁾は湾である。その湾の中の西側は良い投錨地である。中の方、湾の中で 20 尋の水深のところに停泊する。またそこに停泊せずに行ってさらに中の方へと湾に入るならば、10 尋 [の水深] である。そこに先の尖った山がある。その山をハーンドゥー *Khândû*⁴²⁾ という。その西側に、斜面に向かって *qarṣu* [斜面を背にして?] 高いところに荒れた城がある。その城をクズラル・ヒサル *Qızlar Hîṣârî*⁴³⁾ という。このヒサルをさらに西側に回り込むと、サリンディー・スユ *Salindî Şuyî*⁴⁴⁾ という川が流れている⁴⁵⁾。その川の東側はカラマーンである。西側はスルターン・アラー・アッディーン *Sultân 'Alâ al-Dîn*⁴⁶⁾ の土地 *yerler* であり、その名はアラーイーヤ地方 *'Alâ'îya jânibi*⁴⁷⁾ である。この川が両者の間で境になっている。その川のさらに西側にアフマドジャという、海を見下ろして聳える *hawâla*, 島のような丸い岬の上に、荒れた城がある⁴⁸⁾。その城をフランク人 *Afranĵ tâ'ifası* はカスタールー・ルーンバルダ *Qaştâlû Lûmbârda*⁴⁹⁾ という。即ち、「大砲のヒサル」*Top Hîṣârî*⁵⁰⁾ の意味である。事実、大砲の石 [砲丸] のように丸い岬の上にある。この城からアラーイーヤは 20 マイルである、北西微 *qarta* 西の方角に。かく知られるべし。以上。

40) *barcha*. 船体がどっしりと高く、横帆を備え、主として嵩高物用の商船として用いられた帆船 [Soucek 1992b: 15]。

41) 現在の *Kaledran* と思われる。Ökte 1988: 1599 (注 4-196) では「*Yakacık (Kalederan)*. *Anamur* と *Gazipaşa* の間の湾」とする。手許の地図で *Anamur* 岬の西方に *Yakacık* 川を確認でき、これが注ぎ込む湾を言うのであろう。

42) 不詳。

43) 不詳。名は、「娘たちのヒサル」の意。

44) *Salindî* は古代ギリシアの町 *Selinus/Selinti* (現 *Gazipaşa*) の名に関わる名称であらう。*Salindî Şuyî* は *Gazipaşa* 中心部の東を流れる *Hacimusa* 川と思われる。この川の河口部南に *Selinus* の遺跡がある。Ökte 1988: 1599 (注 4-199) では「*Yakacık Deresi*. カラマンの西の境界になっている小川」とする。

45) 付図では *Qızlar Hîṣârî* は *Salindî Şuyî* の西に描かれており、本文の説明と矛盾する。TY 6605 写本の付図では *Qızlar Hîṣârî* が 2 箇所描かれている。

46) ルーム・セルジューク朝の君主 *'Alâ' al-Dîn Kayqubâd 1* 世 (在位 1219-37) を指していると思われる。彼は東部アナトリアで勢力拡大に努め、地中海岸では *Kalon-Oros/Galonoros/Candeloro/Skandeloro* を取って *'Alâ'îya (Alanya)* とした。

47) *'Alâ'îya/Alanya* に関しては次章参照。

48) 不詳。

49) *Lûmbârda* とあるが、本来は *bûmbârda* が正しいのであろう。イタリア語で臼砲、射石砲を意味する *bombarda* に相当する語と思われる。

50) 叙述の内容から、*Gazipaşa* 南方の岬を指しているように思われるが、定かではない。

381b 第 183 章：本章はアララーイーヤ城 'Alā'īya Qal'asi を説明する。

このアララーイーヤ⁵¹⁾の、沖から行く場合の目印はこうである。その上手に高い山々がある。その山々に三つの頂き qulla がある。中央にある頂きの下にこのアララーイーヤがある。さらに近づくと、山の上にアララーイーヤの城が見える。例えて言うと mathalan, アララーイーヤは島に似た岬である。その岬は [海岸と] 繋がった山である。その山の上がこの城である。その城の下側は人が住む ma'mūr dur. 上の山は空っぽ hālī [khālī] である。しかし ammā, その、空っぽであるところから上は、別のヒサル hisār である。その中にヒサルの人々 hisār erenleri⁵²⁾ がいる。しかし ammā, 下の方、海岸には煉瓦で造られた大きな塔 qulla⁵³⁾ がある。その塔の足下に、しかし wali, 南側に停泊地がある。そこで、船首と船尾から [綱を取って] 結んで小型船が停泊する。その小型船の [停泊地の] 前に石造りの五つの造船所 darskhāna⁵⁴⁾ がある。しかし ammā, このアララーイーヤの前面は吹きさらしのところ achuq yer である。港は無い liman yoqdur⁵⁵⁾。夏場には停泊地である。東南風の日々には注意せよ。ここは風に晒されている achuq のである。

さて wa ba'dahu, このアララーイーヤからアンダーリーヤ Andāliya⁵⁶⁾ は 90 マイルである、西北西の方に。マナーウカート川 Manāwqāt Suyi⁵⁷⁾ は 30 マイルである。かく知られるべし。以上。

382b 第 184 章：本章はマナーウカト Manāwqāt の海岸を説明する。

このマナーウカト⁵⁸⁾の町 shahr は海岸から 3 マイル程内陸に入った平原に横たわる

51) Alanya. アナトリア半島南岸中央部に位置し、Antalya から東へおよそ 140 km である。一帯は西北 - 東南方向に伸びる砂浜主体の海岸であり、Alanya は海へ大きく張り出した標高 250 m に及ぶ岬の頂から麓にかけて発達した町である。古くはギリシア人やアルメニア人の手にあり、13 世紀末からカラマン君侯国に属し、さらに 15 世紀後半にはオスマン朝に帰した。この岬の東西に入り江があり、港として用いられてきたのは東側だけである。岬の東北の麓にある Kızıl Kule から頂上まで岬の南半分を囲むように城壁が伸びている。この中が旧市街であり、別の城壁でさらに区切られた最も標高の高い部分が内城である。内城は現在無人で東ローマ時代の教会堂の跡があるだけであるが、オスマン朝時代には駐留兵の兵舎が置かれていたという。旧市街のうち内城の外側部分が居住区であり、そこには初期オスマン朝時代の隊商宿跡のほか、ルーム・セルジューク朝スルターン 'Alā' al-Dīn Kayqubād 1 世 (在位 1219-37) によって創建されオスマン朝スルターン、Sulaymān 1 世によって再建されたとされる Süleymaniye Camii などがある。

52) 駐留兵を意味するのであろう。上の注を参照。

53) Kızıl Kule を指すものであろう。

54) dār al-ṣinā'at に由来する tersane (造船所) に当たる。Kızıl Kule からやや南の海岸に tersane の跡があり、これは 'Alā' al-Dīn Kayqubād 1 世によって建設されたものとされる。この tersane は半円形天井と海に面したアーチ型開口部を持つ細長い空間が 5 列に並んだものである。

55) 本格的な港ではない、の意か。あるいは、風 liman になることはない、の意か。

56) Antalya. 第 185 章で説明される。

57) Alanya と Antalya の間に位置する Manavgat 川。

58) Manavgat. Alanya と Antalya のほぼ中央に位置する。

町である。その町の前に荒れた城⁵⁹⁾がある。その城の東側を一川 bir şu⁶⁰⁾が流れる。海に注ぐ。またそこにヤル・ギョル Yalı Gölü⁶¹⁾という大きな湖がある。この湖の流出口 ayaq は海岸に近いところで今述べた川に注ぎ込む。その湖の東南側にカルプス・スユ Qarpuz Suyı⁶²⁾という川がまたある。その川の東南側で、アラーイーヤからこちら側にあるのはカラ・ブルン Qara Burun である。そのカラ・ブルンとこのカルプス・スユの中央にチャタル・アダス Chatal Adası⁶³⁾という小島がある。その小島と海岸の間を船は通らない。浅瀬である。

さて wa ba'dahu, 上述のマナーウカト川⁶⁴⁾の西北西側で 30 マイルのところ旧アンダーリーヤ Eski Andâliya⁶⁵⁾がある。これは荒れた城である。アンダーリーヤとこの荒れた城の間に二つの大きな川 şular がある。その川の一方をキョプリユ・スユ Köprü Suyı⁶⁶⁾という。また一方をアク・ス Ak Şu⁶⁷⁾という。しかし ammâ, このアク・スはエイルディル Egirdir⁶⁸⁾の方から流れ出し、来て海に注ぐ。このアク・スとアンダーリーヤの間にアト・アトラドゥ At Atladı⁶⁹⁾という高い絶壁がある。また流れる川 şular がある、アンダーリーヤに至るまでに。以上。

383b 第 185 章：本章はアンダーリーヤ Andâliya の海岸 kanârlar を説明する。

このアンダーリーヤ⁷⁰⁾の、沖から行く時の目印はこうである。その東側に山々がある。

59) 今日の Selimiye に位置する Side の遺跡を指すのであろう。Side は Manavgat 川の河口にギリシア系の人々によって建設された町で、Alexander 大王が紀元前 333 年に奪った。紀元前 1 世紀には Cilicia 方面の海賊による奴隷交易の場としても知られた。

60) Manavgat 川であろう。

61) 不詳。

62) Manavgat 東方の Karbuz Çayı。

63) 不詳。

64) Manavgat 川。上では「ある川 bir şu」とのみ言及されている。

65) 今日の Belkis に位置する Aspendos/Aspendus を指しているのであろうか。Antalya との間に二つの川があると説明されており、Antalya 西郊の Perge ではないと思われる。Aspendos は、Alexander 大王によって紀元前 333 年に征服され、後にローマの支配を受けた。今日見られる遺跡はローマ支配時代のものである。

66) Aspendos の近くを流れて地中海に注ぐ Köprü Çayı であろう。

67) アンタルヤの東方で北から南に流れて地中海に注ぐ Aksu Çayı であろう。

68) 北方に位置する Egirdir 湖を指して言っているのであろう。Ökte 1988: 1607 (注 4-211) では、「トルコ西部の İsparta 東北部にある湖。知られる限り、流出路を持たない (Egirdir)」と説明されているが、現在の地図で見ると、運河で南の湖と繋がっているように思われる。「アク・スが流れ出している」とピーリー・ライースが言うのは、この南の湖のことであろうか。

69) 不詳。意味は「馬が跳ねた」。Ökte 1988: 1607 (注 4-212) は、「おそらく Düden. これは一連の海岸の絶壁と深い渓谷で、それらの間を抜けて見事な滝が海に流れ落ちる」とする。

70) Antalya/Attalia. 紀元前 2 世紀に Pergamon 王 Attalus 2 世によって建設された。東ローマ時代には要塞としてまた十字軍時代にはパレスティナへの出発基地として重要であった。1207 年ルーム・セルジューク朝によって征服された。1391 年にオスマン朝に占領されたが、オスマン朝支配に組み込まれたのは 15 世紀末である。旧市街は岬の上に形成され、その下に港を擁する。

その山々が連なって来る。西側で尽きる。その尽きたところに丸い山がある。この山の西側は低い。その低いところへ真っ直ぐに行く。近づくとこの城の塔と城壁 burj [o] bârû⁷¹⁾がはっきりする。この城の前に港がある。この港は小さな港である。そのためにその港へ到着した船は船首と船尾から〔綱を取って〕しっかりと結んで停泊する。またその港の入口の両側に一つずつ塔 birghûs がある。その塔の一方から一方へ鎖が張られている。見知らぬ船は入れない。

さて wa ba'dahu, この港からギュウェルジン島 Güwerjin Adası⁷²⁾は 12 マイルである。シルデン岬 Shilden Burni⁷³⁾は 60 マイルである, 南微 qarta 西南の方角に。しかし ammâ, このシルデン岬とアンダーリーヤの間にはいくつかの港がある。それぞれをシルデン岬の章で説明しよう。しかし wa illâ, ここでは bu maħallda クブルズを説明しよう, あとに残らないように。かく知られるべし。以上。

384b 第 186 章：本章はクブルズ Qıbrız なる名の島を説明する。

このクブルズ島⁷⁴⁾は, 実際 ḥaқиqata⁷⁵⁾, 他の島と同様ではない。というのも, この島の回りすべてにあるところのアナドル海岸 kanârlar, シリアの陸地 quru, イスカンダリーヤの海岸 kanâr はすべてはムスリムの住むところ musulmânliq である。この島はちょうどこれらすべての中央にあって, 往来の頻繁なところに位置している taraddudda qalmışdur⁷⁶⁾。わけでも khuşûş-ile, 大変に恵まれた豊かな âbâdâni 島である。その周囲の長さ miqdâr は 600 マイルほどである。山々と流水が多い。7000 の村があると言う程である。しかし ammâ, かつて zamânla 我々のパーディシャーフ⁷⁷⁾の軍船とともに askar gemilerinle⁷⁸⁾ある時経廻った折にこの島に至って宿営した時, その島の名士たち ba-nâmlar にこの島のことを私は尋ねた。「この島には 7000 の村があるのは事実か」と言うと, 彼らはこう答えた。「以前はありました。しかし ammâ, 今は 4000 の村です。」すべての村に様々の種類の果物, ダイ

71) ここでは特定の建造物を指しているのではないだろうが, 広く知られた塔としては 13 世紀創建とされる Yivli Minare が旧市街にある。

72) 不詳。Ökte 1988: 1611 (注 4-214) では「Kuş Adası. Antalia 南西沖合いの小島」とする。

73) Antalya から南に伸び, Yardımcı 岬で西に向かう岬。第 187 章 (389a 以下) で扱われている。

74) Kypros/Kıbrıs/Cyprus. 地中海東部に位置する地中海第 3 の島。紀元前 13 世紀にアカイア人が植民し, 紀元前 8 世紀頃にフェニキア人が居住するようになった。その後アッシリアやエジプトさらにはアケメネス朝ペルシアの支配を受けた。紀元前 1 世紀にはローマの領有となり, 帝国の分裂に伴い東ローマ帝国の領土となった。7 世紀以後たびたびムスリムの侵攻を受け, 12 世紀以降はフランスの Lusignan 家の領有に帰し, 15 世紀後半までの約 300 年間に互ってその支配が続いた。15 世紀末にヴェネツィア領となってその交易活動に重要な役割を果たしたが, 1571 年にオスマン朝の手に帰した。

75) ḥaқиqatda あるいは ḥaқиqatan (Ar.) とあるべきところであろう。

76) Arı 2002: 573 では stranded (取り残された, 立ち往生した, 座礁した) とする。

77) Bâyezid 2 世 (在位 1481-1512) を指すと思われる。

78) gemilerinle とあるのは Ayasofya 2612 写本と Hazine 642 写本のみか。TY 6605 を含め 932 年本系写本の多くでは gemilerile とある。

ダイ turunj, レモン, 精糖所 shakar-khâna⁷⁹⁾がたくさんある。それから wa andan soñra その島の南部には製塩所がある。そこから、毎年船が来て、塩を積み出す。これから後は、船乗 bahriyalar に必要なところを説明しよう。

さて imdi, クブルズ島は確かに gerchi 大きな島である。しかし likin, その北部には船が停泊すべきところは少ない。その方面に一城がある。キリーナ・ブーフアリー Kirîna Bûfari⁸⁰⁾という。その城の前に小さな港を有する。それをアラ・フースィヤ Ala Fûsiya⁸¹⁾という。この島の北部にはそれよりも有名な港を有しない。この港の40マイル西側に、北に面した湾がある。パンディヤ Pandiya⁸²⁾という。その湾に岩礁 dökündüler がある。その岩礁の東北側から中に入る。小さな船が停泊する。この後 bundan soñra, フールナーカントゥー Fûrnâkantû 岬⁸³⁾を西側に回り込むと、パンダーヤ Pandâya の湾が目に入る。その湾の中に流れる川 şu がある。その川の西北側にパンダーヤの一小島がある。この小島とクブルズ島の間は小さい船には良い港である。飲み水が必要になれば、小島に正面している大きな島で見つかる。

さて wa ba'dahu, カーウ・サントゥーフアーン Qâwu Şântûfân⁸⁴⁾は、クブルズ島の西側で、北の[方に伸びた]岬である。この岬の1マイル正面に小島がある。細く長い小島である。ちょうどガレー船 kadirgha に似ている。その小島と岬の間[の水深]は16尋である。このカーウ・サントゥーフアーンの20マイル南方に小さな港がある。その小港をアリー・カサル Ali Kasar⁸⁵⁾という。これの前に二つの小島がある。かなり平坦な小島である。その小島からさらに10マイル南方にまた小島がある。ティラーパナ Tirâpana⁸⁶⁾という。それらのこちら側⁸⁷⁾に湾がある。その湾は投錨地である。また飲み水も見つかる。その湾から10マイル南側にバーファ Bâfa⁸⁸⁾の岬を見出す。バーファの岬は低い岬である。大索1本分の長さだけその岬に近づくならば、大丈夫 jâiz である。もし岬の南側で錨を降ろすならば、[水深]20尋で良い停泊地である。もし、バーファに行きたいと望むならば、バーファは南西に面した村である。その村の前の海岸に二つの塔 birghûslar がある。それらの塔

79) サトウキビと解すべきか。

80) Kypros 島北部海岸に位置する Kyrenia. トルコ語では Girne.

81) 不詳。Ökte 1988: 1617 では後半部を Kusiye とする。TY 6605 写本では Fûsiya と読める。Ökte 1988: 1617 (注 4-218) では「Girne/Kyrenia 城の中世の名前」と説明している。

82) 付図では Pandâya とある。TY 6605 写本でも本文では Pandiya, 付図では Pandâya とする。恐らく島の西北部に位置する Chrysochou 湾であろう。

83) 不詳。

84) 不詳。Arnauti 岬を指すと思われる。付図では Qâwu Şânti-Fân とある。

85) 不詳。

86) Kypros 島西部に Drepanu 岬があり、恐らくその近くの島を指すと思われる。

87) アナトリア側(北側)を指すと思われる。Drepanu 岬のすぐ北の海岸に東から川が流れ込む。飲み水が見つかるというのはそのことを踏まえた記述であろうか。

88) 付図では Bâf とある。Kypros 島西南部に位置する Paphos であろう。

の前は停泊地である。この南東側に大索 3 本分の長さの浅瀬のところがある。その浅瀬の上は 17 スパンの水深がある。一方の塔と浅瀬の中央は 4 尋の水深である。この浅瀬以外にその浅瀬の沖側にまた浅瀬がある。この浅瀬からその浅瀬は大索 1 本分のところである。二つの浅瀬の中央は 3 尋の水深である。しかし wa lâkin, 最初の浅瀬と同様、後の浅瀬の上も 17 スパンの水深である。しかし ammâ, これら以外に、バーファの 3 マイル東南側にムーリーナ Mûlina⁸⁹⁾ という二つの島がある。それらの小島の西側に浅瀬がある。その浅瀬の上は 6 スパンの水深である。東側に大索 3 本分の長さの浅瀬がまたある。水中に見える。しかし ammâ, 小島 adajuq とクブルズの間は [水深] 3 尋半である。もしバーファからムーリーナへ行きたければ、1 マイル程沖を回りこむがよい、その浅瀬から救われるように。もしムーリーナに行って停泊したければ、これらすべての東側に小島がある。その小島の南西側にある浅瀬から大索 1 本分離れて進むべし、5 尋の水深のところを通るように。小島の東側へ大索半分の長さに近づいて、6 尋の水深で錨を降ろすべし。正面に岬がある。その岬に向って ol buruna qarşu [その岬の沖で?] 錨を降ろすと [水深] 2 尋である。

さて wa ba'dahu, この小島から 6 マイル東側に岬がある。その端が浅瀬の sighlu 岬である。その岬の上にイステイー・ハーリー İsti Khâlî⁹⁰⁾ という岩山 taşlu dağ がある。その山はちょうど大フクロウ öğü に似ている。そこから向こうへ 6 マイル東に [行ったところに] 独立峰 yalnız dağ がある。その山をパティラ・トゥールスィー Patira Tûlsî⁹¹⁾ という。そこから 12 マイル東南東の方に、カーウ・ビヤンク Qâwu Biyânqû⁹²⁾ がある。カーウ・ビヤンクは白い岬である。その岬の東側に脇 qoltuq⁹³⁾ がある。そこでの良い投錨地である。そこには真水 tatlu şu がある。夏も冬も流れる。その川 şu の 2 マイル東側に湖がある。ピスーリー Pisûri という⁹⁴⁾。その湖の前は夏場には良い停泊地である。

さて ba'dahu⁹⁵⁾, この湖から 20 マイル東南側にカーウ・ダ・ガータ Qâwu Da Ghâta⁹⁶⁾ [がある]。「猫の頭」kedi bashî の意味である。これは丸い岬である。その岬は遠くからはちょうど島に似ている。この岬の西側に浅瀬がある。その浅瀬は西北の方角に 1 マイル伸びている。南側に小さな小島がある。その小島から 10 マイル北側に塔 birghûs がある。

89) 不詳。

90) 不詳。

91) 不詳。

92) 付図では Aq Burun と記されている。Aspro 岬と思われる。

93) 語義は定かでないが、ここでは人目につきにくい奥まった位置にある入り江の意で用いられているように思われる。第 157 章に既出。

94) 現在 Aspro 岬の東側の入り江が Pissouri 湾と呼ばれているが、現在それと思しき湖は手許の地図では確認できない。Ayasofya 2612 写本の付図では湖らしきものは何も描かれていないが、TY 6605 写本の付図では当該の海岸部に湖にも見られうる深い入り江が描かれている。

95) wa 無し。TY 6605 写本では wa が書かれている。

96) Gata 岬であろう。Akrotiri 湾の西に位置する。

その塔の前に村がある。この村をラマ・スー Lama Sû⁹⁷⁾という。測鉛 isqandil を使って行く。そこで 10 尋の水深が見つかり、錨を降ろす。ここから 6 マイル東の方に、古い荒れた城がある。その城から向こう側 2 マイルのところ白い岬がある。その岬は 4 マイルの幅を有する。その 4 マイルの間はすべて白い土地である。その白い土地の東側で白い土地が尽きると、ワースィルーパーティムー Wâsilûpûtimû⁹⁸⁾を認める。ワースィルーパーティムーから 6 マイル東側に教会堂がある。アユータナースイユー Ayûtanâsiyû⁹⁹⁾という。ここから 6 マイル向こうに、低い岬がある。正面からはその岬は二股 iki chatal に見える。名をムズータ Muzûta¹⁰⁰⁾という。その岬から 2 マイルほど離れて進むべし。岬の端は浅瀬である。この岬から 12 マイル東南東に白い岬がある。鳥のように陸から離れて見える。その岬をカーウ・カティー Qâwu Katî¹⁰¹⁾という。この岬の端で、3 マイル沖寄りに denizden 浅瀬のところがある。いつでもその岬を東の方へ回り込む時は、北の方へ向って製塩所の前へ行く。その製塩所の湿地 azmaq¹⁰²⁾を東の方へ過ぎるとアリー・カス Ali Kas¹⁰³⁾に至る。しかし ammâ, 湿地の前から 1 マイル程離れて進むべし。浅瀬なのである。このアリー・カスに來た船は塩を積み込む。そこにある塔 burhûs に正面してアヤー・ラーザルー Ayâ Lâzarû という教会堂¹⁰⁴⁾がある。その教会堂の前では船は 7 尋の水深に停泊する。しかし ammâ, 錨を放つべきところは 12 尋である。また十分にしっかりと錨を捉える。

さて wa ba'dahu, ここから 12 マイル南南東の方に、大きい yoghun 岬がある。その岬をカーウ・サーン・ジュールジー Qâwu Şân Jûrjî¹⁰⁵⁾という。どれだけその岬に近づいても、深い。もし岬の方に üstünde [突端に?] 錨を降ろすならば、[水深] 12 尋から 20 尋までである。この岬を、6 マイル東の方から北の方へ回り込むと、教会堂がある。その教会堂に向って小さな船が停泊する。というのは、浅瀬になった sighlu 小港がある。その小港からカーウ・キリガ Qâwu Kirigha¹⁰⁶⁾は 12 マイルである、東南東の方へ。このカーウ・キリガはクブルズ島の東南の [端の] 岬である。カーウ・キリガからマーゲーサ

97) Lemesos/Limassol であろう。

98) 不詳。

99) 不詳。

100) 不詳。

101) 付図では Kita とある。TY 6605 写本では、本文で Katî, 付図で Kit か。Cypros 島南岸の Kiti 岬と思われる。

102) 現在 Kiti 岬の北に Larnaca 空港があり、そのさらに北側に塩湖が広がる。

103) Larnaca を指すと思われる。アヤー・ラーザルー Ayâ Lâzarû の注を参照のこと。

104) Larnaca の聖ラザロ教会堂 (Church of Saint Lazarus) かと思われる。この推定が正しいとすれば、アリー・カス Ali Kas とは今日の Larnaca (あるいはその一角) を指すことになる。

105) Pyla 岬と思われる。Ökte 1988: 1625 (注 4-234) では「Larnaka と Greco の岬の間にあって Ayna Nopa の西の岬」と説明している。

106) Greko 岬であろう。Cypros 島の東南端。付図では Qâwu Kiriya か。TY 6605 写本の本文、付図でもそれぞれ同様。

Mâghûsa¹⁰⁷⁾は20マイルである、西北の方角に。しかし ammâ, この途中に浅瀬になった sighlu ところがある。ひとつひとつ説明しよう。さて imdi, 先に述べたカーウ・カリーガ Qâwu Karigha はちょうど四つの耳を有する¹⁰⁸⁾島のようなものである。その岬へ大索半分の長さ近づいて進むと大丈夫である。いつでも岬をマーグーサの方へ回り込むと、大索2本分 [の距離のところに] 良い停泊すべき場所がある。大索を陸に結び、錨を東へ20尋のところに降ろす。ここから向こうへ6マイルだけマーグーサ側に二つの小島がある。小島をイブスィー・ラドヤ İpsi Lâdyâ¹⁰⁹⁾という。それらの小島の北側から入る。12尋の水深のところに錨を降ろす。

さて ba'dahu, その小島から3 [マイル]¹¹⁰⁾西北の方に、かなり尖ったいくつかの小山がある。その小山をアユークルヤ Ayûkulya¹¹¹⁾という。そのあたりは浅瀬である。大索3本分沖へ伸びている。そこから向こう3マイルのところにカリンディー・ウイティー Qalindî Wuytî¹¹²⁾が見える。ここから6マイル [のところに] 浅瀬の島 sighlar adası が見える、北西の方向に。そこには岩礁 taşlar がある。ウダユー Wudayû という。サータ・カタリーナ Şânta Qatarîna¹¹³⁾と [も]いう¹¹⁴⁾。それらから大索1本分離れて進むべし。浅瀬である。その浅瀬には三つの出入口がある。サータ・カタリーナの出入口は11スパンである。サータ・カタリーナからムニーヤ Mûmiya¹¹⁵⁾に至るまではすべて浅瀬である。もしムニーヤの出入口から入りたければ、ムヤームザ Mûyâmûza¹¹⁶⁾に近づいて進むべし。その北側のところに浅瀬のところ sigh yeri がある。海峡の中は18スパンの水深である。もし大きな出入口を通るならば、ムヤーム Mûyâmû¹¹⁷⁾から離れて進むべし。大索4本分北に回り込んだ後、錨を降ろす。もし容易な qolay 風 [順風?] で行くならば、その浅瀬の南側から行くと、塔 birghûs に真っ直ぐに進むべし。そうすれば、マール Mâla¹¹⁸⁾に着く。

107) Ammochostos/Famagusta/Gazimagusa. Kypros 島の東海岸に位置する。紀元前3世紀にエジプト王 Ptolemaios 2世によって建設され、13世紀に Acre の陥落によって多くのキリスト教徒を受け入れたことを契機に発展した。1372年に Genova が、1489年には Venezia が、さらには1571年にオスマン朝が支配下に置いた。

108) 実際に四角ばった形であるが、そのことを指して言うのであろう。

109) 不詳。

110) mil (マイル) が欠けているが、TY 6605 写本等では確認できる。

111) 不詳。TY 6605 写本本文では Ayûkilsaya か? Ayasofya 2612 写本, TY 6605 写本いずれにおいても付図にはこの地名が記されていない。Ari 2002: 576 では Eyû Kilise と転写し、英訳部分においては Ayu Külbe とする。

112) 不詳。Qalindî Wuytî と読んだが、TY 6605 写本では Qalandî Wayitî か。Ari2002: 576 では Kalendî ve Yeti と読み、それに対応する英訳では Kalindî and Yeti としている。

113) 不詳。

114) 両者は別の島を指すか。

115) 不詳。

116) 不詳。

117) Mûyâmûza のことであろう。TY 6605 写本でも Mûyâmû とある。

118) 下に Famagusta の外港 dish limanı とあるが、正確な位置は分からない。

そこで錨を降ろす。もし大きな船で行くならば、マーラの前で二方向に錨を降ろす。マーラはマーグーサの外港の前辺りである *dish limanının önleridür*。マーグーサ¹¹⁹⁾：マーグーサは東に面した美しいヒサル *hişâr* である。そのヒサルの前に二重の港を持つ。内と外の港である。クブルズ島にはマーグーサよりも大きな¹²⁰⁾ところはない。マーグーサからカーウ・サーン・アンディルヤ *Qâwu Şân Andirya*¹²¹⁾ は 50 マイルである、東北東の方角に¹²²⁾。カーウ・サーン・アンディルヤからキリーナ¹²³⁾ は 110 マイルである¹²⁴⁾。かく知られるべし。以上。

389a 第 187 章：本章はシルデン岬 *Shilden Burnu* の海岸を説明する。

このシルデン岬¹²⁵⁾ は大きな山々から来て海に降りた、黒い急峻な岬である。その岬の正面に四つの小島¹²⁶⁾ がある。先ずこの岬に近い黒い丸い島である。その島とこの岬の間に錨を降ろすならば、35 尋である。しかし *ammâ*、半マイルこの岬の東北側に錨を降ろすならば、60 尋である。また今述べた東北 [側に]¹²⁷⁾ 大きな島¹²⁸⁾ がある。その島の海岸と [陸] の間を大きなバルチャが通る。深い。しかし *ammâ*、この島の東北側に入り江がある。その入り江で、1 本のイチジクの木の本根元に流水 *aqarja şu* がある。この川は 1 艘のカユク¹²⁹⁾ が給水するに十分である。夏も冬もその川はある *bulunur*。またそこは良い停泊地である。

さて *wa ba'dahu*、この島の西北側に¹³⁰⁾、しかし *walî*、アナドルの海岸に、東北東に面した湾がある。その湾をカーフィルの人々 *kafara tâ'ifası* はワナディーク港 *Wanadik Limanı*¹³¹⁾ という。トルコの人々 *Türk tâ'ifası* はアディラサーン *Adirasân*¹³²⁾ という。これは大きな船

119) *Ayasofya* 2612 写本では金文字で書かれている。

120) *aşlı*。由緒ある、あるいはしっかりした、立派なの意か。Ökte 1988: 1629 では *önemli* (現代トルコ語訳)、*finer* (英訳) とする。また、Arı 2002: 576 の英訳では *peaceful* を当てている。

121) *Kypros* 島の東北端に当たる *Apostolos Andreas* 岬であろう。

122) *Famagusta* から *Apostolos Andreas* 岬と思われる地点まで何も説明が無い。

123) 前出の *Kyrenia*。

124) この間の海岸については説明が無い。この章の冒頭で北側には港が少ないと述べていることに対応するのであろう。ここでキプロス島の説明が終わり、以下再びアナトリア海岸の説明になる。

125) *Antalya* 湾と *Finike* 湾を分ける *Gelidonya* 岬と思われる [Deutsches Hydrographisches Institut 1965: 179-180]。今日の地図では *Yardımcı Burnu* とある。

126) 今日 *Beşadalar* として知られる島々であろう。

127) *TY* 6605 写本では *tarafında*。

128) *Gelidonya* 岬の東沖合いに位置する *Sulu Ada* であろう。この「水がある島」の意の名は、本文の説明にあるように水が得られることに因むか。

129) *qayıq* 櫂と帆を備える小型の船 [Soucek 1992b: 18]。

130) 実際にはほぼ真北になると思われる。

131) ヴェネツィア港の意。Çavuş Burnu と *Küçük Çavuş Burnu* の間の *Çavuş Limanı* と思われる。

132) *Adrasan Burnu* なる岬が *Deutsches Hydrographisches Institut* 1965: 179 で言及されている。これは今日の地図に現れる *Çavuş Burnu* に当たると思われ、*Adirasân* の港とは、上で指摘した通り、*Çavuş Limanı* と思われる。

が停泊できる港である。またその港の周囲は山である。飲み水も見つかる。沖からのこの港の目印はこうである。両側が山である。その港は低い谷のように見える。

さて wa ba'dahu, この港の東北側に丸い岬¹³³⁾がある。その丸い岬の端に小さな岩の小島がある。その小島を西北の方に回り込むと、プールトゥー・ジンウィーズ Pürtü Jinwiz という港¹³⁴⁾がある。この港の入口は北に向いている。しかし ammâ, 大変に隠れ込んだ gizlü 港である。沖から行く時は港であることが分からない。しかし wali, アンダーリーヤ側から行くならば、この港の入口が開いている。分かる。そのまわりは大きな山である。この港はこの山々の間で谷のように見える。もし沖から行く時のこのジンウィーズ港の目印を知りたければ、その上手に大変に大きな山がある。その山の下、海岸に二つの尖った頂きがある。これらの頂きも大きな山である。その一つは北側で、また一つは南側である。その南側にある尖った山のちょうど下にこのプールトゥー・ジンウィーズがある。

さて wa ba'dahu, このプールトゥー・ジンウィーズの北側にあるウチュ・アダラル Üch Adalar¹³⁵⁾へ行きたければ、その島々の沖からの目印はこうである。プールトゥー・ジンウィーズの説明にあった尖った山々のうち北側にある山は南側にある山よりも高い。その北側にある高い尖った山へ真っ直ぐに進む。しかし ammâ, その二つの尖った山々を越えた内陸に、雪を頂いた大きな山¹³⁶⁾が見える。それらに気をつける必要はない。ただ、気をつけるべきはそれら二つの山々に対してである。これらの二つの尖った山々を認めて北側にある尖った山へ向って海岸に近づくと、そのウチュ・アダラルが見える。それらの端 [の島] と海岸の間は深い。大型のバルチャが通る。そして海岸に近いところにある島と中央にある島の間をガレー船が通る。しかし ammâ, 沖寄りにある島と中央にある島間の通行路は無い。というのは、岩礁 tash があるのである。[海岸に近づいた] そのあと andan soñra, 風にしたがってその島々を前方に取る üstüne alurlar. 停泊する。しかし wali, 冬場には停泊地ではない。夏場に停泊する。

さて wa ba'dahu, その島々の北側にタキール・オワ Takir Owa という港¹³⁷⁾がある。この港にパールユー・プーリー Pályü Püli という荒れた城¹³⁸⁾がある。その城の南側は小さな船向けの停泊地である。この停泊地をある者達はアルトゥン・バシマク Altun Bashmaq¹³⁹⁾という。

133) Çavuş Burnu であろう。

134) Ceneviz Limanı. 文字通りには、ジェノヴァ人の港の意。Çıralı/Olympos の南南東に位置する入り江。

135) Ökte 1988: 1635 (補注*) では「文字通りには三つの島。Tekirova [旧 Phaselis] と Ceneviz Limanı の間の海岸にある群島」とする。

136) Tahtalı Dağ (標高 2366 m) を指すのであろうか。

137) Tekirova であろう。古代の Phaselis にあたる [Deutsches Hydrographisches Institut 1965: 178]。

138) 古代の Phaselis の遺跡をいうのであろう。

139) 文字通りには、「金の履物」の意。

さて wa ba'dahu, このシルデン岬から 15 マイル西北西の方にフィーナカ Finaka¹⁴⁰⁾という荒れた城がある。その城の前は良い投錨地である。夏場に 100 隻の船が停泊できるところである。そこに三筋の大きな流水がある。その川 şu のうちの東にある川をサル・ス Şarı Şu¹⁴¹⁾という。中央にある川はまったく申し分がない。並ぶもの無い、薔薇水のように味が良く jullâb gibi tatlu, また大変に冷たい水である。またサンダル şandal が入る大きな川である。この川の源は 4 マイル程内陸にあるフィーナカ Finaka 村の前から —— あちこちに泉がある —— 湧いて出ている。西側にある川をカラ・ス Qara Şu¹⁴²⁾という。このカラ・スも良い冷たい水である。しかし wali, 中央にある川のように大変味が良いわけではない。というのは、そこへ冬場だけ流れる川 gerek şular¹⁴³⁾が合流する。澄んでいない。しかし ammâ, このフィーナカとシルデン岬の間に、しかし wali, シルデンに近いところに、カラ・ウズ Qara Öz¹⁴⁴⁾という港がある。この港へは西北の方から入る。その港の沖からの目印はこうである。すなわち、丸い丘なのである。その丘を右側にとって東南に向かって中に入る。

さて wa ba'dahu, フィーナカ城 Finika Qal'ası の後ろに、即ち西側に、南南西に面した、ギョク・リマン Gök Liman¹⁴⁵⁾という入り江がある。ここは二つの山の間である。しかし wali, 深いところである。かく知られるべし。以上。

391b 第 188 章：本章はケク・オワ Kek Owa という名の港を説明する。

このケク・オワ¹⁴⁶⁾の港の、沖から行く時の目印はこうである。その港の上手にあるアナドルの山々は高く峻しい山々である。その山々の上にテントの形をしたかなり丸い塚のような öyük [=höyük] gibi 頂きがある。その頂きの西側にこれらすべてよりも高い山¹⁴⁷⁾がある。その山の東側は高い。西側は低い。それらの山の下にケク・オワの島が、遠くから見える。というのは、大きく、また長い島であるから。その長さは 7 マイルである。もしこの島の東側から中 [陸との間?] に入るならば、帆を使ってバルチャが入る通行路である。もし西南の方から入るならば、この西南側にある海峡の中央に二つの島がある。これらの島は黒く高い島である。それら二つの島の間を大きな船は通らない。障害物がある nâ-pâkdur。それ [ら] と 7 マイルの長さのある島の間を通るならば、38 尋の水深のところを通ることになる。もし、それらのすべてを東側において、南西側にあるアナドルの岬¹⁴⁸⁾と、[二つのうちの]

140) Finike/Fineka であろう。

141) 黄色い川の意。Alakır 川であろうか。

142) 黒い川の意。Karasu 川であろう。

143) *Türkiye'de Halk Ağzından Derleme Sözlüğü*, Vol. VI, Ankara, 1972, p. 1997 では gerek は「夏に枯れて冬に流れる川」とある。

144) Yardımcı 岬の西側、Finike 湾の東部に位置する Karagöz に近い入り江を指すと思われる。

145) 恐らく Finike 南方に伸びる Gök Burun の西側の入り江を指すのであろう。

146) Kekova 島。

147) Kekova 島の北西に位置する Uyluk Tepe (標高 3015 m) を指すと思われる。

148) Kekova 岬であろう。

一つの島の間を通るならば、25 尋の水深を通る。中に入って建造物に正面して錨を降ろすならば、60 尋の水深である。またそこに、岩礁 *taş* がある。見えない。注意せよ。アナドルの海岸にある港に至るならば、そこはあらゆる風に対して有用な *qâbil* 良い港である。かく知られるべし。以上。

392b 第 189 章：本章はミイス *Miyis* という名の島を説明する。

このミイス島¹⁴⁹⁾はアナドル海岸へ 5 マイルである。沖から行く時は、その島の目印はこうである。この島の正面のアナドル海岸は大きな山々である。その山々の下でミイス島は二つの頂きを持ち *iki chatal*, 赤味がかかった山々である。その山の周囲すべて切り立った *yahım* 岩である。さて *imdi*, この島には一城 *bir qal'ası* があった。この城をカーフィルの人々 *ka-fara tâ'ifası* はカスタールー・ルースイー *Qaştalû Rûsî* と言う。「赤いヒサル」*Qızıl Hişâr* の意味になる¹⁵⁰⁾。ロードゥース *Rûdûs* が征服されると¹⁵¹⁾この城 *qal'a* のカーフィルはクブルズ島へ逃げた。現在 *shimdi* 荒れている。しかし *ammâ*, その城から外に今もカーフィルの村がある。塩をつくっている。ヒサルはその前面に製塩所を有する。その製塩所の傍らに、しかし *walî*, ヒサルの前に天然の港がある。まことに良い港である。大型のバルチャが入る。というのは深いのである。ヒサルに正面して沖で停泊すれば、どこも停泊地である。かく知るべし *shöyle bileler*。以上。

393b 第 190 章：本章はメンテシェ県 *Liwâ'i Mentеше*¹⁵²⁾にあるイルキー・カラ *İlqî Qara* の海岸を説明する。

このイルキー・カラ¹⁵³⁾は湾である。その湾の入口に二つの島がある¹⁵⁴⁾。その島とアナド

149) *Meis/Megisti/ Kastellorizo* であろう。ドデカネス諸島の島の一つ。*Kaş* の南西の沖合約 5 km に位置する。聖ヨハネ騎士修道会、ナポリ王などの支配を経て 16 世紀にオスマン朝支配下に入った。19 世紀にはフランスの占領を経てイタリアの支配を受けた。第二次大戦後ギリシア領となっている。

150) *Meis* 島の廃城。港を見下ろす高台に建つ。Ökte 1988: 1647 (注 4-258) では「文字通りには赤い要塞。今日の名前 *Kastellorizo* の元になっている。この城は聖ヨハネ騎士修道会によって 14 世紀に建設された。外壁と僅かの塔を除いてほとんど今日残っていない」とする。

151) ロードス島は 1522 年 *Sulaymân* 1 世の命を受けたオスマン朝軍によって征服された。

152) *liwâ'* はアラビア語で旗を意味する語で、オスマン・トルコ語の *sanjaq* にあたる。*sanjaq* は、オスマン朝では、軍管区に由来する行政単位 (*beylerbeyilik* [「州」] の下位単位である「県」) を表す語として用いられ、ここの *liwâ'* は行政単位としての *sanjaq* と同義に用いられている。*Menteshe* 地方は、*Menteshe* 君侯国の支配領域に由来する。*Menteshe* 君侯国は、ルーム・セルジューク朝が 13 世紀にモンゴルの攻撃を受けてその勢力を失って以来アナトリア半島西南部で優勢となった。オスマン朝の *Bâyazid* 1 世によって征服されるが、1402 年のアンカラの戦いで勝利した *Timûr* によって復興された。1424 年 *Murâd* 2 世によって最終的にオスマン朝に組み入れられ、*sanjaq* の一つとなった。

153) *İlqî Qara* と読むべきか (*Redhouse Yeni Türkçe-Üngilizce Sözlük*, ikinci baskı, 1974)によれば、*ılgı* は *yılgı* の別形で、「仔とともに放し飼いにされている雄雌の馬の群れ」あるいは「飼い馴らされていない牡の馬や仔馬」の意)。今日の *Kalkan* に当たると思われる。*Kalkan* は *Meis/Megisti/ Kastellorizo* の西北に位置する湾の奥にある。

154) *Yılan Adası* と *Sıçan Adası* を指すと思われる。

ルの〔海岸にあるこの湾の〕西北側〔との間〕はバルチャが停泊すべきところである。しかし wali, 東南風の日々の停泊地ではない。夏場の停泊地である。この停泊地で飲み水が欲しくなれば、その〔湾全体の〕東北側に位置する〔より〕内側の湾の端 hadd で海岸に、比類無く良い冷たい川 şu が流れている。その川の目印はこうである。赤い絶壁があり、その赤い絶壁の前に、海に落ち込んでいる丸い岩 qaya がある。この川は、その岩と今述べた絶壁の間にある¹⁵⁵⁾。またその辺りは波静かな yufqa şulu¹⁵⁶⁾ 投錨地である。またもう一筋の川 şu¹⁵⁷⁾ がこの湾の西側に〔ある〕。またその辺りは良い投錨地である。かく知られるべし。以上。

394b 第 191 章：本章はメンテシェ県 Liwâ'i Mentеше のギョク・ス Gök Şu とさらにイエディ・ブルン Yedi Burun を説明する。

このギョク・ス¹⁵⁸⁾の正面は、波静かな yufqa şulu 良い投錨地である。しかし wa illâ, 吹きさらしのところである。夏場に停泊できる yatulur。冬の停泊地ではない。ここへ到着する船は水を手に入れに来る。そのあと andan soñra, 航海を続ける。その西側にスティイー・カーウ Sitî Qâwu という七つの岬 yedi burun¹⁵⁹⁾ がある。この岬の上に大きな山々がある¹⁶⁰⁾。山々の鼻先 burun〔尾〕が来て海に落ち込んで七つの岬になっている。しかし wali, 投錨地はない。〔投錨〕出来ないところである。その七つの岬を東北の方へ 5-6 マイル程回り込むと、チョケルトメ Chökertme¹⁶¹⁾ という港がある。この港をカーフィルの人々 kafara tâ'ifası はスイーム・ブーラ Sim Bûla という。これは良い港である。その港の入口に岩礁 tash がある。見える。かく知られるべし。以上¹⁶²⁾。

155) Google Earth (2011 年 7 月 10 日時点) の画像で確認する限り、Kalkan の港の棧橋の突端と相対して北の海岸に小さな突出部がある。これがかつては海岸に近い小島だったと思われる。すぐ東に続く海岸には赤みがかった崖壁がある。両者の間に件の川が流れ込んでいるという意味であろう。この川と思しき流路が背後に確かめられる。

156) Arı 2002: 584 では浅瀬 a place of shallow としている。

157) 不詳。

158) Eşen 川を指すと思われる。この川の河口から 10 km ほど内陸に Lycia の都市 Xanthos の遺跡がある。

159) Fethiye 南方に Yedi Burun なる岬を確認でき、またその東南東の内陸に Yediburun なる村があるが、ここにいう yedi burun はより東方の Zeytin Burnu から Yedi Burun にかけて連なって並ぶ岬を指すのであろう。

160) ここで述べられている海岸のすぐ北側の内陸部には 2000-3000 m 級の山々が連なる。

161) 不詳。Ökte 1988: 1655 (注 4-263) では、「Fethiye と İblis Burnu の間の小港。Çökertme の語は、他にも意味はあるが、空ろな hollow, 憂鬱 depression を意味する。トルコの、エーゲ海岸や地中海にそっていくつかの地名として使われている。断崖を背にした狭い浜を指すように見受けられる」としている。

162) この章に限らずアナトリア南岸部の説明においては、トルコ語でなく西方言語によるとみられる地名が散見する。例えば Sitî Qâwu は明らかにラテン語系言語の表現であり、現代イタリア語であれば Sette Capi となるであろう。『キターブ・パフリエ』が編纂されたのは 16 世紀前半期であり、当時既にアナトリア南岸部はオスマン朝領域に組み込まれていた。その時期において西方言語に由来する地名がトルコ語的な地名表記に先行して記載されていることは興味深いと

395b 第 192 章：本章はメンテシェにあるイブリス İblis 海岸とマグリー Maghrî 港を説明する。

このイブリース İblis¹⁶³⁾ は余りに深いところである。だれも安心できない *ḥudûr etmez*。しかし *ammâ*, その前に小島 *adajuklar* がある。それらの小島の西北側にあるアナドルの海岸にある入り江で 1 隻の船が停泊する。深さは 14 尋である。さて *imdi*, この辺りで元来の有名な *aşl ba-nâm*¹⁶⁴⁾ 港はマグリー港 *Maghrî Limanı*¹⁶⁵⁾ である。この港は天然の広い港である。その港ではあらゆる風に対して停泊できる。その入口に小島¹⁶⁶⁾ がある。その小島の両側を通れる。しかし *walî*, 大型の船は大抵この島の南側から入る。その島の上に荒れた建物がある。その建物をカーフィルの人々 *kafara ṭâifası* はパタ・ルース *Pata Lûs*¹⁶⁷⁾ という。彼らはマグリー港をマクリー *Maqrî* という。この港の中に、流れる泉 *aqar biñar* [*piñar*] がある。

さて *wa ba'dahu*, このマグリー港の入口から外、西北側に大きな湾がある。その湾の中に小さな島がある。その小島の上にアヤー・ユールキー *Ayâ Yûrki* という荒れた教会堂がある¹⁶⁸⁾。この小島に正面して、しかし *walî*, アナドル海岸で飲み水が見つかる。また良い投錨地である。しかし *ammâ*, いくつかの岩礁 *taşlar* がある。要注意である。しかし *ammâ*, ここでは元来の停泊地 *aşl yataq*¹⁶⁹⁾ はこれである。即ち、その湾の入口の南側の岬に二つの小島¹⁷⁰⁾ がある。それらの小島とアナドルの海岸の間が良い停泊地である。

396b 第 193 章：本章はメンテシェ県 *Liwâ'i Mentеше* のカラ・ドガン・バーバー *Qara Dوغان Bâbâ* [の島] とカラ・アガチュ *Qara Aghach* 港を説明する。

この [島の名の由来となった人物] カラ・ドガン・バーバーは一つの島¹⁷¹⁾ の上で眠っている。その島とアナドルの間は良い停泊地である。もし飲み水が欲しければ、その東北側で、

↙ ころである。

163) Fethiye の西南に位置する İblis/İblis 岬を指すと思われる。İblis (İblis) は悪魔の意。このすぐ東方に位置する *Gemiler Adası* (いわゆる聖ニコラオスの島) には言及がない。

164) Arı 2002: 586 では *aşl ba-nâm limanı* を the best-known harbor としており、*aşl* 自体の解釈は判然としない。

165) Fethiye. 古代の *Telmessus* であり、のちに *Megri/Makri/Maghrî* と呼ばれたが、トルコ共和国とギリシアの住民交換を経て 1934 年に Fethiye と改称された。Fethiye 湾の東部に位置し、南に深く切れ込んだ入り江に面する。

166) Fethiye 正面の小島を指すと思われる。

167) 不詳。

168) ここにいう小島は *Göcek* 島と思われる。教会堂の名は、付図ではアヤー・キルキー *Ayâ Kirki* とある。TY 6605 写本本文では *Ayâ Kirakî*, 付図では *Ayâ Kirâki* とある。

169) Arı 2002: 586 では the real shelter としている。

170) Fethiye 湾の西部に位置する *Tersane* 島と *Domuz* 島と思われる。

171) *Baba Adası* であろう。*Kara Burun* の東海上で、*Dalaman* 川の河口部に近い。Ökte 1988: 1663 (注 4-267) では、「*Baba Adası*. *Karaburun* の 1 マイル西に位置する島。*Dalaman* 川の河口のやや西。この島の上に、*Kara Doğan Baba* と言われる聖者の墓がある」とする。

しかし wali, アナドル海岸に, 川 chay¹⁷²⁾がある。流れている。またその川に正面している海岸は波静かな yufqa şulu 投錨地である。

さて wa ba'dahu, このカラ・ドガン・バーバーの 10 マイル程西北の方に, キョイ・ジュエズ Köy Jügez¹⁷³⁾という [ところがある]。そのキョイ・ジュエズの前を大きな川 şu¹⁷⁴⁾が流れている。この川へカユクが入る。

さて wa ba'dahu, この辺りで有名な広い港はカラ・アガチュ港¹⁷⁵⁾である。例えば mathalan, この港は南に面した, 二つの山の間の湾である。その湾の, 沖からの目印はこうである。湾の入口の正面 2 マイル程の沖に, 灰色の島¹⁷⁶⁾がある。この島は良い目印である。しかし ammâ, その島の西北側, アナドルに向って 1 マイル半程沖に岩礁 taş がある。見えない。注意せよ。このカラ・アガチュ港へ行きたい時は —— ここは 100 隻の船を収容する港である。大型の船はその港で 30 尋の水深のところまで停泊する。薪の豊富なところである。というのは, 回りすべて山であるからである。そこで eyle olsa, —— 北の方へ 2 マイルほど中へ入り, そして西側へ錨を降ろす。比類の無いところである。以上。

397b 第 194 章: 本章はマルマラス Marmaras なる名の港を説明する。

このマルマラス¹⁷⁷⁾は天然の広い港である。その港の中に, 3-400 隻の船が一度にゆったりと wus'atla 停泊する。また波静かな yufqa şulu 良い停泊地である。飲み水が豊かである。その港の入口から内側で東北側に, 黒く峻しい島¹⁷⁸⁾がある。その島と海岸の間をあらゆる船が通る。深い。港の入口にある大きな島は黒い山である。その山の周囲はどこも深い。バルチャが入る。出る。この島 —— 私が山と呼んだ —— の西南側でアナドルの海岸にある入り江¹⁷⁹⁾は良い停泊地である。その入り江では, 大索を南の方, 海岸に結ぶ。錨を北北西に降ろす。もしさらに [北に向かって Marmaris 湾の] 中へ, 棧橋 iskele の前へと行くなれば, 大型の船はそこで二方向の錨を使って停泊する。というのは, 海岸は浅瀬なのである。

さて wa ba'dahu, この港の入口から外, 西南西の海岸にユランル Yılanlı¹⁸⁰⁾という入り江がある。その入り江の前に黒く丸い峻しい島がある。この入り江は混じり気の無い砂の safi

172) Dalaman 川, あるいはその支流であろう。

173) Köyceğiz は Köyceğiz 湖の北岸に位置する町。ここにいう Köyceğiz は, 実際には Köyceğiz 湖から南の海岸へと流れる水路沿いに位置する Dalyan の町を指しているように思われる。

Dalyan の町はすぐ西方に位置する古代 Kaunos の遺跡で知られる。

174) Köyceğiz 湖から南の海岸へと流れる水路を指していると思われる。

175) Turnalı 岬と Boz 岬の間にある入り江が Karaağaç Körfezi と呼ばれており, ここにいう Qara Aghach 港はこの湾のことを指していると思われる。

176) Yılanlık Adası とと思われる。

177) Marmaris. Karaağaç Körfezi の西側で, 深く北に入り込んだ入り江の最北部に位置する。

178) Keçi 島を指すか。

179) İçmeler の入り江であろう。

180) Çiftlik Adası の正面の入り江を指すと思われる。

qumlu¹⁸¹⁾ 投錨地である。もしその島と海岸の間を通るならば、大丈夫 jā'iz である。というのは、深いのである。

さて wa ba'dahu, この入り江の西南側に丸い灰色の岬がある。その岬のさらに西南側にクズルジャ・イッラキー Qızılja İllaki¹⁸²⁾ という入り江がまたある。その入り江の正面に小島がある。この小島の東北側にある入口の深さは2尋である。また狭いところである。ただ1隻のガレー船だけが避難する sighinur。しかし wali, 夏場には5,6隻の船が停泊する。大索は西南側にある海岸に結ぶ。錨を小島の方に放つ。以上。

おわりに

第194章(マルマリス)をもってアナトリア南岸の説明は終わり、このあと『キターブ・バフリエ』本文における各地の説明は、Karpathos島を経てCrete島からエーゲ海西部の島々を北へ辿りつづがりポリ半島の西側のSaros湾へ至って完了する。

上で訳出された各章においては、すでに指摘されている通り[新谷1990]、沿岸航海に際して必要となる地理的・技術的な知識の記述が主体になっており、歴史的な出来事などに関する具体的な情報は多く見られない。また、構成の上でも、キプロス島がここで述べられていることを別にすれば、海岸に沿って単純に東から西に向かって叙述されており、この区域に関して叙述や構成上の特徴的な事項を指摘することは難しい。しかしそれだけに、『キターブ・バフリエ』の地中海航海案内書としての基本的な特性をよく示す部分とすることができよう。

参考文献 [未見の文献を含む]

- Allibert, C. (1988) Une Description Turque de l'Océan Indien au XVI^e Siècle. L'Océan Indien Occidental dans le *Kitāb-i Bahriye* de Piri Re'is (1521). *Étude Océan Indien* 10, 9-51.
- Arı, Bülent (ed.) (2002) Piri Reis, *Kitāb-ı Bahriye*. Ankara.
- Babinger, Franz (1955) Seyyid Nūh and his Turkish Sailing Handbook. *Imago Mundi* 12, 180-182.
- Bacqué-Grammont, J. -L. & Henri Bresc (2009) La Sicile et les Îles Voisines dans les Portulans de Piri Re'is (1521-1526). *MEFRIM (Mélanges de l'Ecole Française de Rome-Italie-Méditerranée)* 121 (2), 485-590.
- Bausani, Alessandro (1979) L'Italia nel *Kitāb-i Bahriyye* di Piri Reis. *Il Veltro. Revista della Civiltà Italiana* 23 (2-4), 173-196.
- Bausani, Alessandro (1980) La Sardegna nel *Kitāb-i Bahriyye* di Piri Reis. *Geographia* II, 71-79.
- Bausani, Alessandro (1982) La Costa Toscane nel *Kitāb-i Bahriyye* di Piri Reis. In: Gallotta, Aldo &

181) 砂だけの、あるいは、水の澄んだ砂地の、の意か。

182) 不詳。付図では Qızılja İlemeği のようにも読める。

- Ugo Marazzi (eds.), *Studia Turcologica Memoriae Alexii Bombaci Dicata*. Napoli, 29-40.
- Bausani, Alessandro (1983a) La Costa Campana da Napoli a Policastro nel Portolano di Piri Reis (1521-1527). *Annali della Facoltà di Scienze Politiche*, Università di Cagliari, 9, 71-80.
- Bausani, Alessandro (1983b) La Costa Italiana del Tirreno, da Civitavecchia a Ischia, nel Portolano di Piri Reis (1521-1527). *Rasa'il in Memoria di Umberto Rizzitano*. Palermo, 53-64.
- Bausani, Alessandro (1983c) Venezia e l'Adriatico in un Portolano Turco. In: Lanciotti, L. & Fondazione Cini (eds.), *Venezia e l'Oriente. Atti del XXV Corso Internazionale di Alta Cultura*. Venezia, 339-352.
- Bausani, Alessandro (1984) Le Coste della Penisola Salentina nel Portolano di Piri Reis. In: Traini, Renato (ed.), *Studi in Onore Francesco Gabrieli nel Suo Ottantesimo Compleanno*, 2vols. Roma, 53-59.
- Bausani, Alessandro (1986) Le Coste Ioniche della Calabria da Taranto a Reggio nel Portolano di Piri Reis (1470-1554). In: Serra, L. (ed.), *Gli Intercambi Culturali e Socio-Economici fra l'Africa Settentrionale e l'Europa Mediterranea. Atti del Congresso Internazionale di Amalfi, 1983*. Napoli, 453-67.
- Bausani, Alessandro (1988) La Costa Muggia-Trieste-Venezia nel Portolano (1521-1527) di Piri Reis. In: Cerqua, C. Sarnelli (ed.), *Studi Arabo-islamici in Onore di Roberto Rubianacci nel suo Settantesimo Compleanno*. Napoli, 65-69.
- Bausani, Alessandro (1990) *L'Italia nel Kitab-i Bahriyye di Piri Reis*, ed. Leonardo Capezzone. Venezia.
- Clutton, E. (1987) *The Isolarii*: Buondelmonti's *Liber Insularum Arcipelagi*. In: Harley, J. B. & D. Woodward (eds.), *The History of Cartography* I. Chicago, 482-484.
- Deutsches Hydrographisches Institut (1935) *Mittelmeer-Handbuch, IV. Teil, Griechenland und Kreta*, 4. Auflage. Berlin.
- Deutsches Hydrographisches Institut (1959) *Mittelmeer-Handbuch, I. Teil, Ostküste Spaniens und Balearen, Südküste Frankreichs und Korsika*, 4. Auflage. Hamburg.
- Deutsches Hydrographisches Institut (1965) *Mittelmeer-Handbuch, V. Teil, Die Levante*, 5. Auflage. Hamburg.
- Deutsches Hydrographisches Institut (1966) *Mittelmeer-Handbuch, II. Teil, West- und Südküste Italiens, Sardinien und Sizilien*, 5. Auflage. Hamburg.
- Deutsches Hydrographisches Institut (1967) *Mittelmeer-Handbuch, III. Teil, Die Norküste von Afrika*, 5. Auflage. Hamburg.
- Dörtlük, Kayhan (1996) *Alanya*. İstanbul.
- Esin, Emel (1980) La Géographie Tunisienne de Piri Re'is, à la Lumière des Sources Turques du X^e /XVI^e Siècle. *Les Cahiers de Tunisie* (Numéro spécial), 585-605.
- Esin, Emel (1986) La Description des Côtes Algériennes de Piri Ra'is. *Studies on Turkish-Arab Relations*, 47-60.

- Harley, J. B. & D. Woodward (eds.) (1992) *The History of Cartography*, Vol. 2, Book 1, *Cartography in the Traditional Islamic and South Asian Societies*. The University of Chicago Press.
- Herzog, R. (1902) Ein Türkisches Werk über das Ägäische Meer aus dem Jahre 1520. *Mitteilungen des Kaiserlich Deutschen Archäologischen Instituts*, Athenische Abteilung, 27, 417-430.
- Heyd, U. (1956) A Turkish Description of the Coast of Palestine in the Early Sixteenth Century. *Israel Exploration Journal* 6, 201-216.
- Imber, C. H. (1980) The Navy of Süleyman the Magnificent. *Archivum Ottomanicum* 6, 221-282.
- Kahane, H. & A. Tietze (1958) *The Lingua Franca in the Levant, Turkish Nautical Terms of Italian and Greek Origin*. Urbana.
- Kurtoğlu, F. & H. Alpagot (eds.) (1935) Piri Reis, *Kitabı Bahriye*. İstanbul.
- Mantran, Robert (1973) La Description des Côtes de l'Algérie dans le *Kitab-i Bahriye* de Piri Reis. *Revue de l'Occident Musulman et de la Méditerranée* 15-16, 159-168.
- Mantran, Robert (1977) La Description de la Côte de la Tunisie dans le *Kitab-i Bahriye* de Piri Reis. *Revue de l'Occident Musulman et de la Méditerranée* 24, 223-235.
- Mantran, Robert (1981) La Description des Côtes de l'Égypte dans le *Kitab-i Bahriye* de Piri Reis. *Annales Islamologiques* 17, 288-310.
- Mantran, Robert (1985) La Description des Côtes Méditerranéennes de la France dans le *Kitab-i Bahriye* de Piri Reis. *Revue de l'Occident Musulman et de la Méditerranée* 39, 69-78.
- Mantran, Robert (1986) La Description des Côtes de l'Andalousie dans le *Kitab-i Bahriye* de Piri Reis. *Actes du XII^e Congrès de l'Union Européenne des Arabisants et Islamisants (Malaga 1984)*. Madrid, 497-507.
- 三橋富治男 (1966) 16世紀・東方水域におけるオスマン=トルコ 『駿台史学』 19, 33-53.
- 三橋富治男 (1970) ピリー・レイスの「海洋の書」に見えるシナ海 『オリエント』 13 (3・4), 171-184.
- Orhonlu, Cengiz (1970) Hint Kaptanlığı ve Piri Reis. *Belleten* 34, 235-254.
- Ökte, Ertuğrul Zekâi (ed.) (1988) Piri Reis, *Kitab-ı Bahriye*, 4 vols. Ankara.
- Özdemir, Kemal (1992a) *Osmanlı Deniz Haritaları, Ali Macar Reis Atlası*. İstanbul.
- Özdemir, Kemal (1992b) *Ottoman Nautical Charts, The Atlas of Ali Macar Reis*. İstanbul.
- Özdemir, Kemal (1994) *Piri Reis*. İstanbul.
- Pitcher, Donald Edgar (1968) *An Historical Geography of the Ottoman Empire*. Leiden.
- Senemoğlu, Yavuz (terc.) (1974) Piri Reis, *Kitab-ı Bahriyye, Denizcilik Kitabı*, 2 vols.
- 新谷英治 (1990) “Kitab-i Bahriya” の性格 —— Ayasofya 2612 写本本文を中心に —— 『東洋史研究』 49 (2), 107-139.
- 新谷英治 (1992) 『キターブ・バフリエ』の全体像とオスマン朝の地中海世界 『西南アジア研究』 37, 1-18.
- 新谷英治 (2000) オスマン朝期の地中海航海案内書と地図 新谷英治編 『中東世界の伝統技術に関する歴史地理学的研究』 (科学研究費補助金基盤研究 (A) [研究代表者新谷英治] 研究成果

- 報告書), 209-235.
- 新谷英治 (2006) 16世紀のオスマン朝におけるローカル・アイデンティティとグローバル・スタンダード —— 地中海航海案内書と世界図の分析から —— 芝井敬司編『西洋の歴史に見る「グローバル・スタンダード」と「ローカル・アイデンティティ」』(科学研究費補助金基盤研究(A)[研究代表者芝井敬司]研究成果報告書), 46-52.
- 新谷英治 (2007) ヨーロッパとアジアを結ぶ海の回廊 関西大学東西学術研究所編『アジア・世界をつなぐ海の回廊 —— 文化の出会い ——』(関西大学東西学術研究所シンポジウム報告書シリーズ1) 関西大学東西学術研究所, 161-179.
- 新谷英治 (2011) 『キターブ・バフリエ』韻文序に見えるインド洋 橋寺知子・森部豊・蜷川順子・新谷英治共編『アジアが結ぶ東西世界』関西大学出版部, 420-449.
- Soucek, Svat (1973a) À Propos du Livre d'Instructions Nautiques de Piri Re'is. *Revue des Études Islamiques* 41, 241-255.
- Soucek, Svat (1973b) Tunisia in the *Kitab-i Bahriye* by Piri Reis. *Archivum Ottomanicum* 5, 129-296.
- Soucek, Svat (1975) Certain Types of Ships in Ottoman-Turkish Terminology. *Turcica* 7, 233-249.
- Soucek, Svat (1992a) Islamic Charting in the Mediterranean. In: Harley, J. B. & D. Woodward (eds.), *The History of Cartography*, Vol. 2, Book 1, *Cartography in the Traditional Islamic and South Asian Societies*. The University of Chicago Press, 263-292.
- Soucek, Svat (1992b) *Piri Reis and Turkish Mapmaking after Columbus*. London.
- Uzunçarşılı, İ. H. (1948) *Osmanlı Devletinin Merkez ve Bahriye Teşkilâtı*. Ankara.
- Ülkekul, Cevat (2007) *XVI. Yüzyılın Denizci bir Bilimadamı Yaşamı ve Yapıtlarıyla Piri Reis*, 3 cilt. İstanbul.
- Yurdaydın, Hüseyin G. (1952) Kitâb-i Bahriyye'nin Telifi Meselesi. *Ankara Üniversitesi Dil ve Tarih-Coğrafya Fakültesi Dergisi* 10, 143-146.

(関西大学文学部)